5.2. スミスから新古典派へ

前節では、A. スミスの『国富論』の冒頭部分を詳しく読むことによって、スミスの発見した分業の考えには確かに互恵性の概念が含まれており、古典派経済学が提示した市場経済の観察は <公正としての正義> が必要とする市民社会の構想を理論的に支えるに相応しいものであることを確認することができた。次節ではこの考えが新古典派経済学にはどのように伝えられたのかを考察する。ところで諸君がミクロ経済学の講義で聴いた通り、市場取引もまたその参加者の全てにとって取引前よりも有利な（少なくとも不利にはならない）結果しか生じない、という意味で互恵的である（経済学では「個人的合理性」と呼ぶ)。しかしスミスが『国富論』で論じていたのは、社会から切り離して考察された市場それ自体ではない。そのような社会から独立した市場自体を分析する理論は新古典派によって確立されたのであって、それ以後例の「個人の利己的な行動が社会的厚生を生み出す」というお馴染みの市場観が現代では一般的となった。そしてこうした現代的観点からスミスの経済思想を振り返ることによって、彼もまた『国富論』で（有名な「自由放任」の根拠として）そのように主張しているのだとするスミス解釈を良く見受けるが、その解釈は非常に表面的であり殆ど誤りであることを我々は既に知っている。恐らく「スミスの学説を巡るイデオロギー」がここに形成されているのである。

ところで私は今、新古典派経済学の成立とともに市場は社会から独立にそれ自身として考察の対象となった、と述べた。しかし明らかに現実の市場は社会から切り離されて存在するものではないのだから、新古典派経済学は古典派からの認識論上の後退ではないのだろうか? しかしそれどころか現代では古典派ではなくむしろ新古典派理論こそが正統理論とされ、もっぱら大学などで教えられ研究されているのは何故なのか? 単にそれが数学的に洗練されているためか? そもそも一体何故新古典派は経済学の歴史に登場しなければならなかったのだろうか。 その理由は経済学の根本概念である（市場）価値について、新古典派理論が古典派経済学者たちの陥っていた「労働価値のイデオロギー」から経済学を救い出したからなのである。従って我々はもはや古典派の経済学に戻ることはできないのである。以下ではそれについて説明しよう。

『国富論』においてスミスは、その後新古典派が現れるまで D. リカードや K. マルクス、J.S. ミルらを含む著名な理論家を長きに渡って支配する「二種類の価値」の定義を有名な「価値のパラドックス」とともに与えた[*1]。

> 注意すべきは、価値という言葉に二つの異なる意味があり、時にはある特定の物の効用を表し、時にはその物の所有がもたらす他の品物を購買する力を表すということである。一方は「使用価値」、他方は「交換価値」と呼んで良いだろう。最大の使用価値を持つ物が交換価値を殆どあるいは全く持たないことがしばしばあり、逆に最大の交換価値を持つ物が使用価値を殆どあるいは全く持たないことがしばしばある。水ほど有用な物はないが、水は殆ど何も購買しないだろうし水との交換で手に入れられる物は殆ど何もない。逆にダイアモンドは殆

[*1] 本節においても特に断りのない限り引用は [4, (1)] からのものである。

ど何の使用価値も持たないが、しばしばそれと交換して他の物を極めて多量に手に入れることができる [pp.60–1]。

経済学は市場において決定される（市場）価格をその分析の対象とする。従って二つの価値概念のうちで経済学にとってより重要なのは明らかに上に言われている交換価値の方である。そしてスミスも明確に「交換価値」を彼の経済学にとっての研究対象であるとして、自身の基本問題を次のように定式化している。

> 第一に、この交換価値の真の尺度は何か。あるいは全ての商品の真の価格は何であるのか。
> 第二に、この真の価格を構成し、あるいは形成している様々な部分は何であるのか [p.61]。

初めの問題でスミスは、交換価値の「真の尺度」を（商品の）「真の価格（$\neq$ 市場価格）」と同一視してそれが「何であるのか」と問い、二番目の問題でその真の価格は「いかなる部分から成り立っているのか」という問いを提起している。その後の 200 年に及ぶ経済学の発展は我々に、そのような真の価格など存在しないこと、この問題は恐らく不適切に、はっきり言えば誤って立てられた問いであることを教えてくれるのである。即ち経済学において意味を持つ価値の概念とは、市場モデルという表象装置において成立する均衡価格に過ぎないのであって、それによって認識できることは、価格という概念は市場で取引される諸商品相互の関係性において成立する、従って抽象的な概念だということである。つまり現代の経済学は、価値（価格）に対して商品自体に想定されるような（労働などの）何らかの実体性を求めても無駄であることを教えるのであるが、スミスは未だこの事を認識していなかったことが以下のように『富論』の叙述から見て取れる。実際スミスはとりあえず、労働が交換価値の真の尺度である、と宣言してみせる。

> [...] ある商品の価値は、その商品を所有しかつそれを自分で使用するつもりも消費するつもりもなく他の商品と交換しようと思っている人にとっては、それによって彼が購買または支配し得る労働の量に等しい。従って労働が全ての商品の交換価値の真の尺度なのである[*2] [p.63]。

これは説明になっていない。諸君は落ち着いて考えてみれば、上の文章の中の「労働」という語句

[*2] このいわゆる「労働価値説」の思想史的起源（の少なくとも一つ）は、もしかしたら J. ロックにあるのかもしれない。ロックは『市民統治二論』で次のように述べている。

「たとえ、大地と全ての下級の [神による] 被造物とが万人の共有物であるとしても、人は誰でも自分自身の身体に対する固有権を持つ。これについては、本人以外の誰もいかなる権利も持たない。彼の身体の労働と手の働きとは彼に固有のものであると言って良い。従って自然が供給し、自然が残しておいたものから彼が取り出すものは何であれ、彼がそれに自分の労働を混合し、それに彼自身のものである何ものかを加えたのであって、そのことによりそれを彼自身の所有物とするのである。それは自然が設定した状態から彼によって取り出されたものであるから、それには彼の労働によって他人の共有権を排除する何かが付与されたことになる [3, 後編・第 27 段落、強調は全てロック自身による]。」

スミスは当然ロックのこの著作を良く知っていたはずである。スミスは引用の最後の「彼の労働によって他人の共有権を排除する何か」を、自然の物が今や身に帯びることとなった「価値」と解釈したのではないか、という推測はある程度もっともらしいだろう（なお引用中の「固有権」は通常は「所有権」と訳される property の訳語として、邦訳者の加藤教授が特にロックの翻訳に際して考案されたものである）。

を他の任意の商品の名前に置き換えることができることに気づくはずである。さらにこうした特定の財を価値の尺度として選び出すと、この労働という財の価値は何であるのか、そしてそれはどのようにして測定されるのか、という困難な問題が持ち上がるだろう。スミスはこうした問題に正面から答えることはできない。

> しかし労働が全ての商品の交換価値の真の尺度であるとはいえ、それらの商品の価値が普通に評価されるのは労働によってではない。二つの異なる労働量の割合を確かめることはしばしば困難である。[...] 大部分の人々にとって、労働の量よりもある他の商品の量の方が意味が良く分かる。一方ははっきりした手で触れることのできる物体であるが、他方は抽象的な観念であってそれを十分に理解し得るにしても、前者ほどには自然かつ明白ではない [pp.65–6]。

こうして「労働が全ての商品の交換価値の真の尺度である」という、単なる間に合わせの説明は破綻するのである。それで、結局価値の尺度として当時の（現在でも）通念である貨幣に舞い戻ってしまう。

> しかし物々交換が終わって貨幣が共通の用具になってしまうと、全ての個々の商品は他のどんな商品と交換されるよりも貨幣と交換される方が多い。[...] つまりどんな商品でもその交換価値はそれと交換に得られる労働の量やあるいは他の何らかの商品の量によって評価されるよりも、貨幣の量によって評価されることの方が多いということになる [pp.66–7]。

だがこれでは結局、「真の価値尺度は何か」という初めの問題は全く解けていない。何故ならスミスは貨幣の鋳造に用いられる金銀の価値がその時々で変化することを認めざるを得ないからである。

> ところが金銀は他の全ての商品と同じようにその価値が変動し時によって安価だったり高価だったりする。つまり時によって購買し易かったりしにくかったりする [p.67]。

そしてとうとうスミスは（スミスともあろうものが）次のように言い出す始末である。

> [...] それ自体の価値が絶えず変動している商品は決して他の商品の価値の正確な尺度では有り得ない。等しい量の労働は何時でも何処でも労働者にとっては等しい価値であると言って良いだろう。健康と体力と気力が普通の状態であり、熟練と腕前が普通の程度であれば彼は常に同じ分量の安楽と自由と幸福を放棄しなければならない。彼が支払う価格は、それと引き換えに彼が受け取る品物の量がどれ程であろうとも常に同一であるに違いない。なるほどこの価格が購買するこれらの品物の量は時によって多かったり少なかったりするだろうが、しかし変動するのは品物の価値であって、品物を購入する労働の価値ではない [p.68]。

これでは全くの論点先取りである。ここでスミスは労働が価値の真の尺度であると、説明しているのではなく、単に言い張っているに過ぎない。問題は何故「品物の価値」は変動するのに「労働の価値」は不変なのか、であったはずだからである。「健康と体力と気力が普通の状態であり、熟練と腕前が普通の程度であれば、彼は常に同じ分量の安楽と自由と幸福を放棄しなければならない」

というのがその理由なのか。それならば安楽や自由、幸福などが「同じ分量」であるかどうかはどのようにして測定するのか。

スミスの現実社会に対する広く深い観察は、（現代の我々から見れば）認識の理論的基礎があやふやな状態である彼に対して更なる問題を課すこととなる。彼は依然として労働こそが価値の真の尺度を体現する財であることを固く信じているのだが、上の引用から明らかな通り様々な商品や賃金、利潤、地代などの価値を表示するための財として労働は実際上必ずしも最適ではなく、その際には通常用いられる貨幣に頼らざるを得ないことを認めていた。しかし広く知られている新大陸からの多量の金・銀のヨーロッパ大陸への流入は、当時の（ヨーロッパの）誰の眼にも金・銀の価値の下落を引き起こしたと見られていた。

> アメリカの豊富な諸鉱山の発見は、16 世紀にヨーロッパの金銀の価値をそれ以前の約三分の一に引き下げた [p.67]。

それゆえ彼によれば、例えば地代のようにその契約が長期に及ぶ商品では、その価格を貨幣価値で表示するよりも穀物の量で表示した方がその価値の同一性をより良く保つはずである。

> 遠く隔たった時点で等量の労働を購買するには等量の金銀、あるいは恐らく他のどんな商品によってよりも労働者の生活資料である穀物による方が等量に近いだろう。従って遠く隔たった時点では、等量の穀物の方が同一に近い実質価値をもつだろうし、それがその所有者に購買または支配させる他の人々の労働は等量に近いだろう [pp.71–2]。

我々は先に「価値の（真の）尺度」として労働以外のどんな財を選んでも構わないはずだとごく当然のように述べたが、我々にとってその主張が自明であるのは、我々が現代の完全に形式化された新古典派経済学の理論モデルを持っているからである。スミスは、彼の何時もの現実に対する鋭い観察によって労働以外の穀物という商品もまた価値の尺度として考慮されるべきことを洞察したのだが、こうした現代の整った理論を持たない彼はそれによって更なる混乱の中へと引き込まれて行くことになる。

> しかし注意すべきことは、穀物地代の実質価値の変動は世紀から世紀にかけては貨幣地代のそれよりも遥かに小さいが、年から年への変動では遥かに大きいということである [p.72]。

スミスはこのように、ある商品の（交換）価値が新鉱山の発見やその年の作物の出来・不出来等々といった市場の外で生じる事柄によって影響を受けることを認めなくてはならなかったのだが、「労働は真の価値の尺度としてその価値が一定である」と主張するためには同時に、労働の価値のみがそういった市場外の出来事からの影響を免れていることを証明しなければならないはずである。しかしこれは彼の根本的な観察、即ち、分業（これ自体は新鉱山の発見や豊・不作に類比的な市場外での現象だろう）がその生産性を増大させる、という主張と矛盾するのではないのか? 前節で引用した『国富論』の一節で、彼は確かに分業が労働者の熟練、腕前、判断力を向上させる、と述べていたではないか? それとも「労働の価値」とは、労働者の熟練、腕前、判断力などを超越したものなのか? もしそうならばそれ程にも神秘的な「労働の価値」とは一体何物なのか?

現代的観点からすれば、新鉱山の発見や豊作によって単に金銀や農作物の供給量が増加したために価格の下落を引き起こしたのであり、それ以上でも以下でもない。何度も述べた通り現代の経済学では市場価格以外には意味のある価値概念は存在しないから、これが言われ得る全てである。スミスは上の引用の中で、供給量の増加は市場価格から区別された彼の意味での交換価値の下落を引き起こすと主張しているが、もし金/銀や穀物についてそれが本当ならば、彼はそもそも経済の発展による労働人口の増加によって労働の価値が下落すると主張せねばならないはずである。それゆえ、労働の価値が真の価値尺度として一定不変である、というスミスの根本的主張はますます疑わしいものであると言わざるを得ないだろう。そして結局、以下のような甚だ曖昧かつ不明瞭な断定が価値概念に関するスミスの結論である。

> 従って労働が価値の唯一の正確な尺度であると共に唯一の普遍的な尺度でもあること、即ち様々な商品のあらゆる時、あらゆる場所の価値を比較することのできる唯一の標準であることがはっきりと分る [!]。我々が世紀から世紀にかけて様々な商品の実質価値を、それと引き換えに与えられる銀の量によって評価することはできないということは認められている [?]。[また] 我々は年から年に渡る商品の実質価値を穀物の量で評価することもできない。労働の量によれば我々はそれを世紀間についても年々についても、最も正確に評価することができる。世紀から世紀にかけては穀物は銀よりも優れた尺度であるが、それは世紀から世紀にかけては等量の穀物の方が等量の銀よりも同一量に近い労働を支配するだろうからである。逆に年々では銀の方が穀物より優れた尺度であるが、それは等量の銀の方が等量に近い労働を支配するだろうからである [pp.73–4]。

スミスのこの結論は、明らかに最初に立てられた価値の定義、つまりそこで価値が二つの異なる意味を持つとされていたスミスの価値概念からの殆ど必然の帰結である。彼の交換価値の概念は同時に使用価値という各々の商品に固有の価値（有用性）から切り離すことはできず、それらが商品の価値の共に無視し得ない二つの側面であるという主張から、この結論が極めて自然に導かれるのである。現在の我々の立場から振り返ってみると、この価値概念はその中に矛盾を抱えておりその上に整合的な経済学の体系を築いていくことはできない。経済学がこうした「それぞれの財に固有に備わった価値」の概念から脱却するのに幾世代もかかったのであり、それは遂に新古典派経済学によって達成されたことはもはや言うまでもあるまいと思う。その経済学が（限界）効用の概念を基にどのようにして市場価格を理論的に導出したかは諸君がミクロ経済学の授業で学んだ通りなので、ここではあえて説明する必要はないだろう。目下の我々にとって大切なのはむしろ次のことである。確かに限界（微分）概念はこの経済学にとって当初の理論構成の数学的基礎として導入された。そして後に一部の経済学説史家がこの理論の出現を「限界革命」と呼ぶようになったせいもあって、この「革命」の本質があたかも経済学に微分計算という数学的技巧を導入したことにあると思い込んだ人もいるようである。しかし以上の説明から明らかな通り、価値理論の「革命」の本質はあくまで（市場）価値の概念をどのように考えるかという哲学的な問題にかかわることなのである。それを一般的には次のように言い表すことができるかもしれない。

スミスは価値の概念をそれぞれの財に固有の一種の「属性」のごときものとして表象している。

これは即ち価値に対して何らかの「実体性」を想定することである。そして彼は労働はその価値が不変であるという意味で特別な財であると主張した。その結果、例えば穀物や金/銀などの財はその供給量の変化に伴って価値もまた変動するが、労働は不変の価値尺度としてその供給量（労働人口）の変化の如何にかかわらずその価値は変わらない、という結論を独断的に主張することとなったのである。それに対して限界効用に基づく新古典派の価値概念の本質は、それ自体は実体性を持たずむしろ市場における「関係性」によって規定されるという点にある。新古典派の市場モデルで成立する均衡価格は、消費者の効用関数や所得の分布、また企業の生産技術等、与えられた条件のどれが変化してもそれに伴う需給の変化を通じて変わってしまう。つまり新古典派における市場価値（価格）とは、財・消費者・生産者の相互の関係によって規定される財（取引）の交換尺度なのである。こうして市場価値の概念が確定すると同時に、新古典派経済学は「市場」の概念それ自体をも確立することになった。つまり「市場とは何か（何が市場を形成するのか）」という問いに対して、新古典派経済学は「市場とは、初めに財として与えられた取引の対象、効用関数と所得によって決まる消費者及び生産技術によって決まる企業から成るそれらの総体である」という市場の定義によって答える。現代的な意味での <市場の科学> としての理論経済学がこうして成立することになったのである。

スミスを初めとする古典派経済学者たちが彼らの価値概念において陥っていたイデオロギーを自然主義的（あるいは経験論的）イデオロギーと呼ぶことができるかもしれない。そのイデオロギーは「市場価値」などの本来抽象的な概念を認識するために「労働」のようなより具体性を備えた観念に置き換えることによってそれを捉えようとする。ホッブズやロックが一人ひとりの人間に固有の権利としての自然権の存在を主張していたときに、またロールズが市民的権利を基本財と呼ぶときにもまた、このイデオロギーが働いている。ここでも権利という本質的に主体相互間の関係性においてしか意味を持たないはずの概念に対して何らかの実体性を虚構する発想を見ることができるからである。交換（使用）価値、自然権、基本財などの観念は不可避的にイデオロギー的な観念（本質的には単なる言葉）である。権利や価値などの観念は、それらが概念として機能する適切な表象装置の中で、何らかの適正な関係性を表現することによって初めて、イデオロギーとは区別される科学的概念となるのである。

ここで極めて重要な点を注意しておく。先に私は「市場価値などの本来抽象的な概念云々」と述べたが、それが本来抽象的な概念であるか否かは我々がそれらを（イデオロギー的でなく）理性的な（科学的な）観点から見ることによって初めて分かることなのであり、経済学であれ政治哲学であれそういった分野での認識は、イデオロギー的な観念から始めなくてはならなかったのだ、ということをあれらの偉大な古典的著者たちは教えてくれるのである[*3]。そして同時にあるイデオロ

[*3] 我々は先に「交換価値の真の尺度を見出せ」というスミスが提出した問題を「誤って立てられた問題」と呼んだが、これは完全には精確な表現ではないだろう。むしろこれは真正の科学的問題であったが、新古典派経済学者たちによって否定的に解決された、と言うべきではないだろうか。私としては、スミスから新古典派へ至る一連の歴史を、古代ギリシャにおいて提起された「与えられた角を定規とコンパスを用いて 3 等分する方法を見出せ」という問題や近世のアラビアで問われた「5 次以上の任意の代数方程式の代数的解法を見出せ」という問題が 19 世紀のヨーロッパで数人の天才たちによって否定的に解決されたことと類比的な科学史的事実として捉えたいのである。鈴木 [7, 8] は、自然科学もまたこの様にしてイデオロギーが科学的概念へと創り変えられていく過程であることを、古代から

ギーが「イデオロギーとして見える」ときにはそれは常に他者のイデオロギーであり、自己のイデオロギーは自分自身には隠されている（自身では見えない）のではないか、と推察されるのである。もし自己のイデオロギーが自己に対して可視的で、つまりそちらに注意を向けさえすれば気づき得るのような体の何ものかであるならば、あれほど聡明な思想家たちが我々にすら見える事柄をどうして見逃すはずがあろうか? そしてあのような人々が陥っていた境遇を自分は免れているなどと如何にして想像できようか? つまり哲学における認識という行為は、自分自身をその認識以前の自分とは別の認識主体に創り変えることであり、そのようにして自分が陥っていたイデオロギーから自身を解放することなのではあるまいか。

しかしイデオロギーについて述べるべきことはこれで終わりではない。第 4.4 節でゲーデルの定理に関連して指摘したことだが、一つの科学理論はそれ自身から何らかのイデオロギーを発生させることがある。新古典派経済学もまたその例にもれない。上にも述べた通り新古典派理論が整備されるに従って、市場価格を整合的な概念として確立するためには例えば「消費者」の概念は効用関数*4と所得水準によって、また「生産者」の概念は生産関数*5によって定義されなくてはならないことがはっきりしてきた。こうした生産関数などの数学的概念は市場均衡の概念を厳密に構築するための数学的道具である。生産関数は各企業の生産過程を抽象的に表象しているのであって、描写しているのではなく記述しているのでもない。例えばスミスが「分業は労働者の熟練、腕前、判断力を向上させる」と述べるとき、彼は自分の眼に映る現実の生産工程についての観察を記述している（描写している）と言い得るだろうが、生産関数はそのような意味で現実の生産プロセスを記述しているのではない。それは公理論的理論の構成要素として「与えられている」。その概念は理論の中でそれの果たす役割と機能によってその「意味」が確定するのである。新古典派理論が用いる市場モデルとは、市場の働きに関する我々の理論的直感を形成するための表象装置なのであって、それは <公正としての正義> が我々の正義感覚（正義に対する直感）を形成し鍛えるための表象装置として原初状態を用いるのと同じである*6。だがこうした自覚がマーシャル、ワルラス、メンガー、ジェボンズといった新古典派経済学の創始者たちにあったとは思われない。彼らはスミスの価値概念を改変すると同時に自分たちが経済学の分析の地盤を変更し、新しい課題を背負うことになったのだということを恐らく明晰に自覚することはできなかったであろう。つまり彼らはスミスが行っていた研究即ち「社会の中に存在している市場という制度を、表象装置を介さずに直接にかつ客観的に観察することを通じて認識を得る」という課題を自分たちがそのまま引き継いでいると考えていたはずなのであり、自らの成し遂げたことが「表象装置を創り上げてそれを分析することである」とはっきりと認識することはできなかったと考えられる。労働価値説の抱える自然主義的

ニュートンへと至る天文学の歴史についてのスミス自身の分析によって確かめている。その著作 [5] でスミスは「規則的な運動を行う大部分の天体（恒星）と、それらとは著しく異なる不規則な運動を行う数個の星（惑星）が何故同時に天界に共存し得るのかを説明せよ」という真正の科学的問題が、近代（ほぼスミスの同時代）に至ってついに解決された数千年に及ぶ科学の歴史を見事に描いている。

*4 または選好関係などそれと数学的に等価な概念；[2, 6] などを参照せよ。

*5 または生産集合などの数学的に等価な概念；[2, 6] などを参照のこと。

*6 と言うよりもむしろミクロ経済学またはゲーム理論のモデルの意味を正しく理解したロールズが、それらを参考にして彼独自の原初状態の考えを創り上げたのだと推測される。

イデオロギーから自らを解放した彼らは、現代において一部の人々から「市場原理主義」などと揶揄されるイデオロギーの萌芽を経済学に持ち込むことになったと思われるのである。取り合えずこのイデオロギーを「市場は、政治的過程とは独立したそれ自身の秩序（いわゆる「価格メカニズム」）を備えた制度であり、従って市場に対する政治的介入は最小限度に止めるべきである」という主張のことと解釈しておこう。既に明らかな通り、スミスはこのイデオロギーとは全く無縁である。むしろ現代のこのイデオロギーの無自覚な信奉者がスミスの「自由放任」といった語句をこのイデオロギーの下で解釈するときに、あたかもスミスが市場原理主義の創始者であるかのように見えるのである。

たった今述べたように、新古典派経済学が限界効用の概念を用いて市場価値の概念を明確にすると同時に、市場の概念それ自体が理論的に確立された。つまり現実の社会の中で経済取引等に関連するある領域が「市場」として社会のその他の領域から区別され独立した理論分析の対象となった。こうして理論的対象として概念化された市場は、もはや社会の一部分として存在する現実の市場と同一の対象ではない。現在我々が日常的に市場と呼ぶものは大抵の場合、必ずしも新古典派経済学に限らない現代経済学に登場する様々な市場モデルから醸成されたある種のイメージであろうと思われる。いずれにしてもそれらは現実の市場制度と複合的に重なり合って存在する法的、政治的、社会的その他多くの背景制度を理論的に捨象して得られた抽象的な表象イメージであるのだが、ときに人は（特に経済学者は）そうした市場のイメージを暗黙のうちに「社会そのもの」と同一視してしまう。「市場原理主義」はここから発生するイデオロギーであろうと思われる。

自然科学であれ社会科学であれ、真正な学問の根底には必ず何らかの哲学的な問いが存在している。そのような学問の基礎の研究に携わる者は科学者であると同時にある程度哲学者でもある。しかし哲学の問題とはそれを考えている哲学者自身にとってすらその意味は必ずしも明確ではなく、哲学者にとって難しい仕事は、不思議なことなのだが、「自分の考えている問題とその解決の意味を自分で理解する」ことなのである。何故この仕事が難しいかというとそれは結局、哲学者が自分を自身のイデオロギーから解放することが困難であるからだと思われる。そしてこれが哲学の研究と完全に専門的な学問として確立された分野における研究との違いである。一般にある学問領域が専門分野として確立されると、その際にそれぞれの分野で明確にされた手続きに従って「何が問題であり何がその解決と見なされるか」つまり「問題とその解決の学問的意味」がはっきりと確定する。マーシャルたちが新古典派経済学を創始したとき、その経済学は彼ら自身にとっては未だ現代的な意味での専門科学ではなかったのである。これによって、彼らの自身の仕事の意味に対する理解（自己認識）の中に、不可避的にあのイデオロギーが含まれることになったのであろう。そしてまた哲学者であろうとなかろうと、誰しも全てのイデオロギーから一挙に開放されることはできない。イデオロギーからの脱却は常に部分的でありそれは徐々にかつ漸進的に行われる他はなく、それゆえにどの時代にも何らかのイデオロギーが存在するのである。こうしたこともまたこれらの偉大な先達から我々が学び知ることなのであり、自己のイデオロギーは自身自らには隠されている（見えない）、という先の推測が再び確かめられたわけである。

そして新古典派経済学は「効用」をその根本概念としたために、ベンサムによって既に創始されていた功利主義（直訳すれば効用主義）と強い結びつきを持つことになった。ベンサムの「最大多

数の最大幸福」を現代的な（経済学的な）効用概念に基づいて解釈すると、既に見た通りそれは「社会の総（あるいは平均）効用が最大となる社会編成が正義に適っている」となる。しかし落ち着いて考えてみて欲しいのだが、効用の語を現代的な解釈に従って、即ち新古典派経済学の概念として用いるならばそれは単に「財の消費から得られる満足の程度」を意味するに過ぎない。それはもはやベンサムやミルが本来意味していた「社会的効用」とは違い、高々そのほんの微小な範囲を被うのみである[*7]。現代の経済学者や新自由主義者たちが、例の「競争均衡の効率性」の命題を援用しながら例えば「規制の撤廃」や「小さな政府」などの主張を正当化するとき、彼らは市場で購入された財から得られる満足を暗黙のうちに政治及び社会生活における幸福の全体へと拡張して解釈しているのではないのか。もしそうであるならば彼らは、新古典派経済学によって独立した分析の対象として理論的に確立された「市場」の概念を無自覚に「社会全体」と同一する、先に述べたイデオロギーに陥っているのだという疑いを免れることはできないだろう。

参考文献

[1] Bentham, J., (1789) *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, Dover Philosophical Classics, NY,『道徳及び立法の諸原理序説（上・下）』中山元訳、ちくま学芸文庫 2022 年

[2] Debreu, G., (1959) *Theory of Value*, John Wiley & Sons, Inc, New York, USA, 『価値の理論』丸山徹訳、東洋経済新報社 1977 年

[3] Locke, J., (1690) *Two Treatises of Government*, London,『統治二論』加藤節訳、岩波書店 1993 年

[4] Smith, A., (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London,『国富論（1〜4）』水田洋訳、岩波書店 2000 年

[5] Smith, A., (1795) *Essays on Philosophical Subjects*, London and Edinburgh,『アダム・スミス哲学論文集』水田洋他訳、名古屋大学出版会 1993 年

[6] Suzuki, T., (2020) *Fundamentals of General Equilibrium Analysis*, World Scientific, Singapore.

[7] Suzuki, T., (2023) "Realities and Ideologies in Social Sciences", in *Realism for Social Sciences*, Translational Systems Sciences, Urai (ed), Springer, New York and Berlin.

[8] 鈴木岳著 『社会科学における現実とイデオロギー』準備草稿 2021 年

[*7] ベンサムの「効用」の概念が社会生活のどれほど広い領域に及ぶものであったかについては彼の主著 [1] の特に第 4 章から第 6 章までを参照して欲しい。ロールズはこの点を良く理解していた。彼が説明のために用いた図表の座標軸の示す量を効用とは呼ばずに人々の「暮らし向きへの予期」と呼んでいたことを思い出そう。これを簡略に効用と言い換えてしまったのはむしろ私自身である。